

校長室だより

共学共高

第
75
号

令和6年11月20日発行

発行責任者

白梅学園高等学校長

武内 彰

ケアンズ修学旅行～part3

修学旅行4日目を迎えた。明日は飛行機で帰国する移動日であるから、ケアンズでの生活は本日が実質的に最終日となる。昨日と同じようにホテルで朝食を摂り、その後、徒歩にてケアンズ港へ移動。フェリーに乗船して、グリーン島へ向かう。私は生徒の最後列について乗船した。すでに眺めのよさそうな2階席は満席で、1階席の中央部分に座った。50分程度、あまり波に揺られることもなく、グリーン島へ到着する。

栈橋を歩いて島へ渡る。周囲の海水は美しい。サメを見つけて写真を撮った生徒もいる。この辺りにはウミガメも生息しているらしい。全員で浜辺へ向かう。透き通る海、広がる水平線、すべてが美しい。多くの生徒がサンダルに履き替えて海へ入る。もちろん、ひざ下くらいが海面につかるころまでであるが。さまざまにポーズをとって写真を撮ったり、砂浜に文字を書いて写真を撮ったり、日常では体験できない自然に身を置いて、楽しむ。水着があったら泳ぎたいくらいである。





続いて、グラスボートに乗船する。栈橋で待機していると、ウミガメが泳いでいるではないか。思わずみんなで写真に収める。グラスボートは沖縄コースでも堪能することができるが、船底がガラス張りになっていて、海中の魚やサンゴを見ることができるものだ。出発して間もなく、2匹のサメが船底にくっついてきた。楽しんで泳げるのだろうか。離れる様子もない。途中で、さまざまなサンゴや色とりどりの魚を見ることができた。



下船後は、buffet形式の昼食をいただく。あたりには食べ物を求めて、複数の鳥がやってくる。絶対に与えないでくださいとの指示を受けていたので、誰も与えようとはしないが、なかなか落ち着かないものである。

食後は、再び島内の自由散策である。「校長先生、ずっと浜辺で横たわっていました」という生徒もいれば、ずっと歩き回った生徒もいるようだ。私は、島の反対側まで行って戻ることにした。浜辺で行くのは難しそうなので、内陸部に設けられた歩道を使って行った。途中で、ワニ園があったので、立ち寄って見学した。受付の人に英語で話しかけられて、反射的に返せないでいると、「日本人ですか？」と日本語で尋ねられた。「ラッキー」と心の中で思いながら、入場料を払って中を見学した。美しい魚やクロコダイルたちが静かに生息している。同時に島の文化遺産のようなものも数多く展示されている。ここで、生徒に逢うことはなかった。引き続き、島の端を目指して歩き続けると、リーフの浜で美しい海面が続くところに行き着いた。周囲には数組のカップルがいるくらいである。打ち寄せる波の音に耳を澄ませ、静かな時間を過ごした。グリーン島から再びフェリーに乗って、ケアンズ港へ戻る。



ケアンズ港からは、市内班別散策である。疲れた生徒はホテルへ戻ることも可であるが、ほとんどの生徒が市内へと向かう。私たち教員も各自で市内を散策する。私は途中で「いくらボタンを押しても変わらない歩行者用信号」に出くわしたが、めげることなく歩き続ける。目的のマーケットは朝しかやっていないらしく、閑散としていた。残念である。水族館をチェックして、港近くの観覧車へ行き、プールでくつろぐ親子連れを見ては、我が家にもこんな時があったなと感傷に浸る。その後、ギフトショップへ寄ってからホテルへ戻った。



夕食はホテル近くの中華料理店でいただく。生徒たちは円卓に分かれて座り、楽しそうに歓談している。そういえば、個別に食事することが多かったので、こうした形式もよいなと感じた。食事が終わり、H先生から「最後の夜なので生徒への一言を」と言われ、メッセージを送る。最後は、私「修学旅行は明日で終わりますがー」生徒たち「オオー」私「お家に帰るまでが修学旅行です！」生徒たち「イエーイ！」で締める。ノリの良い生徒たちで助かる。



日本を離れてケアンズでの修学旅行。意欲的に活動しよう、そして楽しもうとする生徒たちの姿を目の当たりにして、嬉しく思う。いずれは世界の人々とかかわりを持って共に仕事

をする日が来るはずだ。その時に、彼女たちはしっかりと渡り合ってくれる、そんな思いが私の中に芽生えている。(終わり)

(共学共高とは：本校のディプロマポリシー（育てたい生徒像）の一つで、「共に学び、共に高め合う」生徒の姿を表す)